

講義2：子育て支援の現状と課題

講師 松原康雄（本学副学長／社会学部教授）

子育ての状況

1 子育ての状況

ワークライフ・バランスと子育て

女性の就業率の高まりと保育に関する潜在的ニーズ

参考

保育所の利用状況 『厚生労働白書平成18年版』より

子どもが0才の時に利用したサービス 保育所 2.9%

子どもが1～2才の時に利用したサービス 保育所 24.8%

当該児童がその年齢の場合

育児休業を利用できたのに取得しなかった理由

女性 第一位 職場に迷惑がかかるため

男性 第一位 自分以外に育児をする人がいたため

↑ つまり、育児は家族の課題というよりも「母」の課題となりがちである。

地域の人間関係の変化、多様な「参加」への模索が必要。

ひとつのポイントから確認したいと思います。講義1で報告された港区と練馬区の調査では、2、3人の例外を除いて全員お母さんが答えたとのことでした。その関連から、子育ての現状を振り返り、確認します。

そのときにワークライフバランスというものを考える必要があるでしょう。

父親は参加する意欲があっても、なかなか参加できません。これもワークライフバランスの問題があります。もちろん女性そのものの就業率が高まってきています。他の調査をみると、お子さんを産んで一定の期間がたって再就職しようという意識もかなり高いです。そのしばらくの間が、今日のポイントになると考えています。

女性といっても、働き方はいろいろあります。

国の仕事で虐待死亡事例に関する虐待の検証委員会をやりました。厚生労働省の担当者が女性でした。死亡事例ですから、厚生労働省の外に資料は絶対に持って出ません。必ず中で作業をします。4次報告の時、その女性の担当者と最後の調整をメールでやり取りしましたが、日付が変わることはザラでした。朝の5時に厚生労働省からメールが届いたこともありました。子どもを育てている方なので、どうしているのかきいたら、親族の協力が得られているとのことでした。ワークライフバランスを謳っているのは、総務省や厚生労働省ですねというと、苦笑いしていました。

そういう女性がいる一方で、仕事と子育てとの関係では、『厚生労働白書平成18年版』

をみると、ゼロ歳児から保育所を利用している人は約3パーセント。残りの97パーセントは、自分で子育てをしています。1、2才児は、約25パーセントです。4分の3は、自身が子育てをしています。もちろん待機児童もいますが、このような数値が出ています。子どもが小さい時には、社会的な保育所を使わない方が多いのです。

育児休業をとれたのにとらなかった理由は、同じ厚生労働白書からですが、男性の第1位を見ると、男性は正直で、自分以外に育児をする人がいたため、これはつまり妻です。だから、母親が子育てをすることになるのです。つまり、この数値からいうと、ゼロ歳児の97パーセント、あるいは1、2才児で保育所を利用していない家族は、母親が子育てを担っていることになります。

子育て支援と地域社会

2 子育て支援と地域社会

顔と名前が一致しにくい地域社会

小地域圏域の崩壊

地域での親子の居場所、活動拠点

子育て支援が地域を変える。

では、その母親が、現実に子育てをしている今の養育環境はどうでしょうか。家庭を取り巻く生活の環境そのものが変わったといえます。

遠くの親戚よりも近くの他人、近くの他人は港区の場合、あまりいないでしょう。地域側から見てみましょう。地域に住んでいる人たちが、どれだけ自分の周りに子育てしている人たちがいるかを知っているでしょうか。

皆さんにお聞きしたいですが、自分の住んでいる両隣等で、親と子どもの顔と名前が一致する親子が10人いるという方、手を挙げてください。意外と少ないですね。では5人では？まだあまり挙がらないですね。

そういうことなのです。

つまり、いろいろな形の支援、私的な支援、情緒的な支援などの話が出ましたが、その担う側は、意外に親子たちを知らないのです。

地域関係そのものは、そのような意味で変わってきました。

コンビニで、バイトが毎日時間によって入れ替わっているのが、対面販売はだんだん少なくなりました。私の時代はお豆腐屋さんに行くというと、お豆腐屋さんは決まっていて、ボールを持って崩さないように帰ってくるのは緊張の時間でした。そういうことがなくなりました。ここ7、8年～10年の動きですが、宅配便は近所に預けていけなくなりました。近所に物を預かれるのはイヤなのです。預かって、届けに行くと、おすそわけというのは、もうないでしょう。物を預かれるのがイヤなのに、そこに子どもをちょっとお願いしますとは言えません。うちの子どもがいうことかなくてとか、勉強しなくてとかは、

暑い寒いの時候の挨拶代わりぐらいです。

そういう中で子育てしなければいけないのです。

夫婦世帯で考えると、夫は会社で仕事を継続、妻・母親は家で子育て、少なくとも子どもが低年齢期はするわけです。ワークライフバランスか、単なる夫側の問題かは別にして、夫が全然帰ってこない、日中いない、夜もいない。しかも、親族は遠いところにいたり、友だちも歩いていける距離にいないとなると、日常の中で思い立ったときの居場所はどこでしょう。

日常の居場所がないと、育児ストレスがたまるという調査も出ています。そうすると地域で親子がいる場所が必要ですし、地域の方から考えてみると、親子の居場所を提供しているだけでは、地域には何の恩恵も受けません。

だけど、私に関わったいくつかの調査の中で、子育て支援をやることによって、今度は地域のネットワークができてくる、新しいコミュニティ作りが始まっている、ということがわかりました。

講義1でのフィッシャーという研究者の、特定の関心を持ったグループが都市部ではできやすいという指摘はその通りで、子育てという特定の機能的な集まりによって、実は地域側も恩恵を受けているのです。

今子どもたちは、知らない人に声をかけられたら、逃げろと訓練されているわけで、地域の中の繋がりどころではないです。

ですが、子育て支援によって地域関係も恩恵を受けています。

九州の福岡市で、学校が休みの土曜日対策で、子どもたちを集めて、親も一緒になって昼間から午後のプログラムをやっている地域があります。地域の人たちがたくさん関わっています。最初は、昼ごはんはおむすびと決まっていたらしいのですが、1年やってみて、もっと豊かにしようと子どもたちと一緒に昼ごはんづくりをプログラムにして、ある日三色丼を作ったそうです。子どもたちはおいしいと食べてくれました。日曜日に、お兄ちゃんと妹が、活動に参加している女性の前を歩いていて、妹が「昨日の三色丼おいしかったよ」とお兄ちゃんに自慢して、「おいしかったからうちのお母さんに作ってもらおうよ」と話していたそうです。レシピとしては簡単ですから、「ねえねえねえ」と声かけたら、「あ、クラブのおばさんだ」と子どもたちが振り向き、「昨日のおいしかったよ」と妹もお兄ちゃんも寄ってきたので、メモ用紙にレシピを書いて渡してあげたそうです。

このように、そのプログラムを通して子どもたちが地域の人たちと知り合い、地域の人も子どもと知り合う。地域側も恩恵を受けているわけです。

子ども110番の家が各地できていますが、全然知らない人の家には飛び込まない。関わりのおばさんが、ここに住んでいるとわかれば飛び込めます。飛び込むようなことが無いにこしたことはないですが。

だから、子どもの安全、安心を守るという親子側も、恩恵を受けている地域側の地域の力も高まるという、両方が恩恵を受けていると考えていいのだと思います。

子育て支援の諸類型

3 子育て支援の諸類型

☆日常養育支援型

例：つどいの広場、子育てサロン・サークル、子育て支援センター（相談や子育てサークルの育成・支援）、一時保育、トワイライトステイ等

☆相互支援型

例：ファミリー・サポート事業

依頼会員・支援会員・両方会員

センターは、両者の仲介と支援会員からの報告書提出によるコントロール

☆健全育成型

例：児童館

☆草の根自主活動型

例：伝統芸能の伝承

☆社会的養護型

例：育児支援家庭訪問事業（子育て不安家庭、養護問題、障害児などがいる家庭への訪問による家事・育児支援）、ショートステイ

どういふ支援があるのか、私は5つの類型に分けてみました。

☆ 日常養育支援型

いろいろなメニューが用意はされていますが、今の子育て支援は、体に服を合わせるのではなく、服に体を合わせるパターンになっていないか。子育ての支援とはこういうものだから、こういう形でしか使ってはいけないとなっていないのでしょうか。

かつて、一時保育はそういう制度でした。冠婚葬祭や親の疾病で利用できるが、その他の理由では使えない。しかも一週間前、二週間前の予約が必要でした。

来週の木曜日に私は熱がでるような気がする、だから今から申し込みます、それが予約ということです。でも、病気はそうはいかない。

要するに、いろいろなメニューが用意されても、使い勝手までを見ないと議論できないと思います。

資料に、つどいの広場、子育てサロン・サークル等々を挙げておきました。いろいろなものがそろっています。とすると、あとは、どういふふうに使えるかがひとつの課題になると思います。

☆ 相互支援型

相互支援型は、ファミリー・サポート事業を挙げました。港区では「子むすび」が、近い活動をしています。この事業も社会的な仕掛けになっている、いい例です。以前だったら、「買い物に行くので、うちのヤスオ君ちょっとお願いね」とか、「私のところで面倒み

てあげるから」と。それが、まさに宅配便を預からない世界だとなかなかできません。

ずいぶん前の調査ですが、全国的な調査で、親が夜中遅くなったときに、子どもを預かってもらえる所があるかどうかを聞き、8割くらいしかイエスと出なかったです。残りの2割は子どもだけで家にいるのかと驚いたことがあります。近所で預けあいができないので残りの2割が気になります、社会的なシステムをつくって預かり合いをするということです。

☆ 健全育成型

健全育成型は、児童館を挙げました。子育て支援というと、就学前まできたらおしまい、学校に行くときあまり話題にならないのですが、学童期というものもあるはず。放課後児童対策などで、親の就労をある部分保障している部分もあると思います。

障害児の保育は進んできましたが、学童保育を保障できているのか気になるところです。港区に伺ったら大丈夫とのお返事をいただきました。学童期の子育て支援が必要なところ。です。

☆ 草の根自主活動型

意外と抜け落ちがちなのが、草の根自主活動型です。伝統芸能の伝承を例に挙げました。昔からやっている町の祭り。そういうものも大きいと思います。最近引っ越してきた人たちに、どういう形で町のお祭りに組み込むか。

私は子育て期の当初、東京江東区に住んでいました。マンションラッシュが続いていた時期で、町内会のおみこしを新規に参入してきた者に担がせるか、担がせないか。結局、地元の町内会にマンション自治会が入ったら担がせると決まり、大人の世界で話が進みました。たしか、うちの子どもは、御神輿を担げなかったかと思います。新しく街ができたところは、自分たちで祭りを形成していきます。その後私は、神奈川県に引越し、そこは、自分たちの街で祭りを作り出していました。

草の根でいろいろな活動を作り出していくことは、とても大切です。地方に行けば、「なんとか太鼓」など、子どもと親が参加している活動がありますが、とても大切だと思います。

☆ 社会的養護型

実は、地域社会の中には、子育てについて、いろいろな課題をもっている世帯があります。子どもへの虐待が引き起こされている家庭もあるので、養育そのものを集約的に支援をする育児支援、家庭訪問事業、ショートステイがあります。ショートステイは、社会的養護型だけではなく一般的にも使えますが、この型に挙げました。

でも、家庭の扉はなかなか開かないです。

みなさんはいかがですか。現時点で、今私が家庭訪問をしますとあって、ずっと玄関の扉を開けられる方は何人いるでしょう。うちは半日待っていただければ、2階に全部物を

あげますが(笑)、2階には上がってもらえないです。2階に上がっていただくには半月いただかないと(笑)。

だいたい扉は開かないです。このことは、子育て支援をやっている方が気になる場所ですね。出てきてくれない人がいるのです。たしかに、あそこにはお子さんがいるはずだけど、子育てサークルとかには出てこないという人がいます。家庭にヘルパーを派遣するといっても、「うちは結構です」とか「汚くしているので結構です」という方が増えています。

先ほども言ったとおり、服に体を合わせるのではなく、どうしたらそういう人たちが扉を開けてくれるかということも、子育て支援全体として考えていかなければいけないのだと思います。

去年新規事業として、ある提案を港区にしました。私が考えたのは、離乳食の宅配で、実費をとってもいいと思いました。離乳食を届けたら、玄関の扉は開くのではないかと考えました。衛生管理の点が問題ということで通りませんでした。なんとか工夫をできないかと思っています。8月・9月は来年度予算の要求時期です。港区以外の方も、ぜひ行政に提案してみてください。マスコミが取り上げて売れるかもしれません。

子育て支援のいろいろなメニュー開発を考えた場合、私は5つに分類しましたが、6つ目の分類も出てくるかもしれないし、この分類の中で新しいメニュー開発をしていかなければいけないかもしれません。ここが、ひとつのポイントです。

子育て支援の実際

4 子育て支援の実際

港区

乳幼児ショートステイ

緊急一時保育

育児サポート子むすび

南青山パンダルーム・南麻布たんぼぼルーム・飯倉いちご

みなとほっとルーム

派遣型一時保育

保育園であそぼう

区立幼稚園の園庭開放

うさちゃんくらぶ

たんぼぼクラブ

児童館・子ども中高生プラザの乳幼児のつどい

子育てひろば あい・ぽーと

子ども家庭支援センター

* 港区保健福祉基礎調査報告書（平成19年実施）では以上のサービスで利用したことがあるとの回答が30%を超えたものは無い。

存在が知られているか、使い勝手がよいかどうか。

「子育て支援の実際」として港区の施策を挙げました。いろいろな施策をやっています。港区の中でも地域を分けてしていると思います。このほかに、今年9月から1施設が増えるということで、港区の中では、子育て支援を増やすという大きな流れができています。

しかし、2007年（平成19年）に、港区が子どもだけではなく高齢者、障がい者も含めて福祉関係の基礎調査をやっていますが、その結果をみると、何が一番知られていて、利用されているか？

これは、「保育園で遊ぶ」、「区立幼稚園の園庭開放」でした。利用したことがあるベストスリーは、上記と「うさちゃんくらぶ」です。どれくらい行ったことがあるかは、一番多いところでも24.3パーセント。意外に利用されていません。知らないと答えている人も多いです。メニューがメニューとして届いていないのです。大きな課題だろうと思います。

意外と頑張っているのが、「子ども家庭支援センター」、14.5パーセント。高くないですが、24.3パーセントが最高とすれば、結構利用されていると思います。

ここがひとつのポイントになると思うのです。子ども家庭支援センターが、全体としては低いですが、一連の並んでいる中では相対的に高い位置にあるのかを考えたとき、港区の場合、子ども家庭支援センターはどんと構えてご相談受けます、とはやっていないです。いわゆる親子のつどいの広場などをやっているのが高いのでしょうか。

だから、この子育て支援の5類型について、行って見て「よかった」とか、具体的に「私は支援を受けた」と実感できるかどうか大きなポイントになっているはず。「目に見える援助」をどういうふうに提供できるか、そこが見えてくれば、子育て支援の裾野が広がってくるでしょう。ニーズはたくさんありますから。

客体から主体への子育て支援

5 客体から主体への子育て支援

戦前の政府スローガン 「贅沢は敵だ」 ← 庶民のささやかな反抗「贅沢はす敵だ」

本日のテーマとの関連では

「贅沢は私的だ」

社会的支援という観点があってこそその子育て支援

私的なサービス購入は対価が高ければ、内容はよくなる。しかし、社会的支援は対価と内容が連動しない。

なにが「社会的」であるかは住民の認識と政策策定との相互関係。

社会的サービスに関する社会的意識の課題

社会的であることのひとつのヒント

親子が「お客様」であれば、顧客の個人的ニーズが最優先になる。親子が主役であれば、ニーズは皆が解決・緩和を考える課題となる。

上記を、ひとつのポイントとしながら、以下を詳しく話したいと思います。

「行って良かった」「楽しかった」「面白かった」で子育て支援はよいのかを話したいです。これが、今日のテーマ「子育て支援は贅沢か」に繋がっていくと思います。

戦前、「贅沢は敵だ」というスローガンが町に貼ってあったそうです。「振袖は止めましょう」とか「パーマネットは止めましょう」とかです。その時に、さすがに庶民だなと思ったのは、贅沢は敵だという張り紙に挿入マークを入れて、ひらがなで「す」と書いて、「贅沢はす敵」だと書いてあったそうです。これをポイントにして、「贅沢は私的だ」としてみました。

このことを皆さんと一緒に考えたいと思います。

つまり、子育て支援は、「社会的であるか」、「私的であるか」。ここが分かれ目になると思います。

いろいろな子育て支援をいろいろな団体の人がやりたいと言った場合、私は、判断する材料の中に、子どもや現実的にはお母さん・親を、いわゆる顧客・お客様としてプレゼンテーションしたり、書類を出してくるところは、基本的には評価を下げています。それは、「私的なもの」になるからです。

対価をきちんと出せば、今はいくらでもいい子育て支援を行えます。

某警備会社も、暗証番号を打ち込まないと中に入れない場所で、充実したスタッフの数で、子どもには至れり尽くせりで英語でも何でも教え、月に何十万円超える料金、お迎える車も並ぶ、というサービスを行っているようです。

だから、お金を出せばそれなりのサービスは買えます。顧客ニーズがあればです。それはできるのです。だけど、社会的に、これは支援が必要だと認知されていること、これがひとつのポイントだろうと思います。

それは、何かというと、2点あります。

ひとつは、利用する側から考えること。

もうひとつは、サービスを提供している人たち、あるいは利用する人たちを取り囲んでいる地域側の問題です。

利用する側から考えると、お客さんとして行って「楽しかったねー、今度はいつ」というのだとなかなか仲間ができない。来て楽しんで帰る。「映画おもしろかったねー」と同じで終わってしまいます。基本的には、行って感動して拍手してアンコールと言って帰り、仲間は広がっていきません。

つまり、自分たちで主体的に組織を作っているかどうかです。それを子育て支援として、ひとつの目標にできているかどうかです。これが、社会的であることのひとつのポイントだと考えています。皆さんとあとで、やり取りしたい点です。

子育て支援を昔からやっている保育士の方の話です。

当初は、いろいろな手遊びを、子どもたちや親たちと一緒にやっていたそうです。そのうち親たちが、「先生、来週何やってくれるんですか」と言い始めたそうです。自分たちと一緒に子どもと遊ぼうよ、他の子どもや他の親たちともいろいろ工夫しながら遊びを考えてみよう、ということがなくなるので、いわゆるプログラム型保育ではなく、集まって自由にまずは遊ぼうと組み込んでいかないとダメですね、とふり返っていました。もちろん最初から「はいやって」と言うとかたまってしまったり、仲のいい人たちだけで帰ってしまうので、そうならないための仕掛けが必要です。

でも、いつも提供するプログラムだけだとどうでしょうか。いずれ、自分たちが楽しめるような形の時間を作ったり、そういうプログラムを少し設定するような仕掛けが必要でしょう。

子育てしているのは親です。人に子育てしてもらうわけではないです。だから、子育て支援の場について、子どもの手が離れてほっとするという部分があっていると思いますが、基本的に自分たちが仲間を作って、そこで相互に支えあうような、ネットワークを作っていく、そのネットワークが広がりを持っていくことが必要だと思います。

もうひとつは、サービスを利用する人たちを取り巻く地域の課題です。

24時間保育を提供しているところもあります。夜間保育といって、夜保育を提供しています。大阪の岸和田で夜間保育をされていた方のお話です。その地域のパチンコ屋さんの蛍光灯を取り替える仕事をされているご夫婦がいて、パチンコ屋さんが閉まって店内清掃が終わって午後11時くらいから明け方にかけて仕事をやるそうです。だから、子どもが夜中ひとりになるので、夜間保育を利用されていました。そのご夫婦は、預けに来る時車中でしばらく通りを見て、人通りが途絶えるとばっと出て駆け足で入ってきて「お願いします」といい、出て行く時も、子どもを迎えて家に帰るときも、保育所の中から通りを見て、人通りが途絶えたらばっと出て行くそうです。周りの人に、夜間保育を利用しているのを感じられるのがイヤだ、「夜中に子どもを預けて」などと何を言われるかわからないからだ

というのです。この意識があると、社会的に子育て支援を位置づけることはできないです。

近隣では、東京の新大久保に24時間型の保育をやっているところがあります。その保育園がすごいと思うのは、ホームページにどういう親たちが利用しているかが出ています。外務省職員夫婦とかです。

これまでに、3回くらい訪ねてお話しを伺ってきました。「こうやって利用しなきゃ、子育てできない人たちがいるのよ。うちの保育園利用してもらえば、普通1人とか2人だけでも、子ども3人育てている人結構いるわよ」と園長先生が自慢していました。すごく面白い方です。その子どもたちが卒園後、親の生活状況が変わるわけではないので、夜間の学童保育まで始めています。「学童保育は、区の補助金だけで運営しているので好き勝手にやっている」と。学童保育を越えた小学校5年生か6年生の女の子も預かっています。300メートルも行ったら歌舞伎町という場所です。「女の子を夜ふらふらさせていたら、性的被害にあう、だったらうちで預かるよ」と預かっています。民家の2階のフスマは骨だけになっています。子どもが暴れますから。でも、それだけのエネルギーをそこで出せているのは大きいなと思います。

子育て支援として挙げた5類型が社会的に位置づけられるとして、あるサービスに対し、「え、こんなこともするの？」という意識が地域に残っていれば、それは私的だからであり、贅沢になるのでしょうか。「贅沢は私的」なのです。

だから、もうひとつ検証しなければいけないのは、大きな流れとしては、いろいろな形の子育て支援が増えてきています。それを、地域社会がどういうふうに認知しているのかが、とても大切な部分です。ゼロ歳児保育について、「生まれたばかりの子どもを預けるなんてかわいそう」という意識がまだ残っているのかどうか、ここが大切です。

一時保育もそうです。自分のリフレッシュで子どもを預けてもいいと地域社会が考えるかどうか、ここも必要です。だけど、では地域が認めないから、使わない、使えない、だとすれば、これも問題です。つまり本来、社会的であるはずのものが、私的な領域に押しやられていないのかも考えていく必要があるでしょう。

この話を数年前にしたことがあります。会場の方に、「老人ホームでボランティアをするので、その間一時保育を利用したい」に、賛成の人、そんなのいいんじゃないと思う人？と尋ね、ずいぶん手が挙がりました。では「駅前留学はどうですか」は、あまり手が挙がらなかったです。ウィンドショッピングに友だちと出かけることも、駅前留学程度しか手があがらない。4つめに、競輪に行く事を聞きました。1人も手が挙がらなかったです。別に競輪を推奨するわけではないですが、「理由の如何を問わない」が今の一時保育のやり方ですという話をして帰ってきました。

その1週間後に1通白い封筒の私信が届きました。全然知らない女性の名前で、ドキドキしました。あけてみたら、その時会場にいらした方でした。「4つめの質問のときに、1人も手が挙がりませんでしたと言ってお帰りになったけれど、実は私は挙げたかったです。でも、私は障害を持つ子どもを育てていて、自分自身も病気を持っていて、自分の通院や

子どもの日中ケアで、いろいろなボランティアに協力していただいて子育てをしています。とても助かっています。そういう私が子育て支援関係の講演会に1人で来ていたことを知られるのが怖くて、手を挙げられませんでした。障害児を育てているくせに、こんなところに来ていると思われるのが怖かった。それをお伝えしたかったです」という手紙をいただきました。

小さな子どもや障がいをもっている子どもを育てていたって、地域の講演会に関心があれば出て行っていいわけです。それを、「そんなのは」と言って、私的なところに追い込んでいくのか、たまにはそういう形でリフレッシュをしていいよね、と考えていくのか。

ここは、子育て支援の、贅沢か、贅沢でないかを決める、つまり、当事者が主体になっているかどうかと同じくらい大切な部分だと思います。

微妙なことはたくさんあります。子育て漫画家で有名な高野さんの講演会をやった時、保育も勿論用意しました。子どもがどうしても泣きやまない時、行政職員が前に出てプラカードで示して保護者に保育室に来てもらうのですが、楽屋裏で、「親がこない！どうせ近くの喫茶店行ってお茶しているに違いない」と行政職員が怒っていました。私は、それもひとつの講演会の出かただから、いいんじゃないのと言いましたが。行政側は、せっかく企画して、高いお金を払って呼んでいるのに、それをサボってというわけです。

本当に一本では割り切れない、多様な考え方があると思います。

でも実際に、子育て支援をしていきながら、みんな考えていくことが必要です。

そうしながら、社会的な考え方を一度改めて考え直すとしたら、そこは子育ての当事者が主体となって、ネットワークを広げていく、自分たちのネットワークだけではなく、地域の人たち、そういうサービスを見ている人たちを巻き込んでいく、そういうネットワークが作れていけば、その中で、改めて「子育て支援、それは必要だ」と理解が得られるのではないかと思います。

そうして、孤立を防ぐために、お客さんと呼ぶのではなく、主体として参加をしていくようになればいい、そこに父が入ってくれば、その輪がもっと広がるのではないかと考えます。

結論です。子育て支援は、「私的」であれば贅沢です。

子育て支援が贅沢ではないために、2つのポイントから、社会的な位置づけにしていくことが必要だと考えます。

時間になりましたので話を終わります。ありがとうございました